

ここに暮らして思うのだが、どうしたら良いか迷う時は、とにかくやってみることだ。やってみてわかることもあるし、思い通りにならなければやめれば良い。それも人一人の力でできることの良さである。

まずは川のルートを決める必要がある。普通は上流から下流まで水勾配を確かめながらルートを決めるのだが、測量する道具もないし、ホースに水をはって高低差を確かめるのも、この広さではやる気がしない。あれこれ思いながら雪解け水がたまつたところを実際に歩いてみることにした。歩きながらきながら水たまりを追ってみると、確かに飛び飛びであるが繋がる線が見える。いや、見えるような気がした。この見えない線に従って歩き続けると起点となる側溝までつながりそうだ。ここまでくれば自分の勘を信じて掘ってみるしかなさそうだ。

最後まで迷つたのは側溝のどこから川を始めるかだ。一番勾配が取れるのは当然、北隅の側溝の起点になる場所だ。ところがそのあたりはかろうじて水芭蕉が残っているところでそこを掘り返すのは気が進まなかった。その水芭蕉の小さな群落を過ぎた側溝の下流に起点を決めた。

掘り始めるのは下流からと決めた。私がまだ小さかった頃、実家のまわりは未舗装で雪解けの時期にはあちこちに水たまりができていた。その水たまりから棒切れで細い溝を刻んで川に見立てて水を流して遊んだのを思い出す。水たまりに向けて下流から溝を掘って水たまりの水が流れたら成功。次の上手の水たまりからまた溝を掘って水たまりがあつたところに繋げる。そして水が流れたら成功。それを繰り返して上流の起点まで行きつく作戦だ。まあ、原始的試行錯誤法だが、これは経験的にも確実な方法だと思つた。

最初の水たまりの水が流れた時には、おそらく私の目は子供の頃の水遊びの時のようにキラキラと輝いていたのではないだろうか。粘土質の土はスコップも入りやすく結構いけるような気がした。ただ、その期待はすぐに壁にぶつかった。木の根つこだ。大きな木のあるところは幹のまわりを大きく迂回するようにルートをとつたが、それでも太い根にあたる。その根を切ってしまう勇氣はなかつたので根の下の土を掻き出して水が流れるようにした。それは結構大変で太い根からは無数の細いヒゲ根が土の中に網の目のようであつて、それを先の尖つたスコップで切りながら掘らなければならぬのだ。それでも、次の水たまりまでという小さな目標があるからなんとか挫折せずに次に進むことができた。次に当たつたのは石だ。隣人も言っていたがここの土地からは丸石が沢山出るのだ。かつて、ここは海の下だつたことがありそれがつながり川ができた名残だと思う。スコップを突き刺してカツンという感覚が手に伝わつたら当たりだ。どんな大きさでどこまで深く埋まつているのか探りながら掘り起こすことになるのだが、中には結構、手こずるものがある。

夢中になって掘っていたら、木々の間から我が家が見える場所まで来た。このペースで行けば一週間かからずに川は掘れるかもしれない。

